

3 点検・評価の結果

基本的方向1 子どもの姿



目 標

自分や他人を大切にし、社会の中でたくましく
生きていくことのできる子どもを育てる

未来へ向かって成長し、未来を担う子どもに、これからの社会をよりよく生きていく力を育むことは、とても重要なことです。

将来の予測が明確にならない現在の社会にあっては、自らの生涯を切り拓く力強さと、他人と協働してよりよい社会を築こうとする頼もしさが必要です。このため、強い意志をもって主体的に考え行動する力と、他と協調しつつともに社会を支える力を育み、社会の中でたくましく生きていくことのできる子どもを育てます。

《施策の方向と施策一覧》

1-1	自分を大切にし、他人を思いやる気持ちを養い、豊かな心を育む	P. 6-15
1-1-1	人と関わる力を身に付ける活動の充実	P. 6
1-1-2	命を大切にする教育の推進	P. 8
1-1-3	道徳教育の充実	P. 10
1-1-4	体験活動の充実	P. 12
1-1-5	読書教育の推進	P. 14
1-2	基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図り、活用する力を育成する	P. 16-17
1-2-1	確かな学力を育成する取り組みの推進	P. 16
1-3	健康に関する意識を高め、健やかな体を育成する	P. 18-23
1-3-1	望ましい生活習慣を身に付ける取り組みの推進	P. 18
1-3-2	食育の推進	P. 20
1-3-3	体力向上の取り組みの推進	P. 22
1-4	社会的な問題に関する認識を深め、意欲と実践力を育む	P. 24-31
1-4-1	環境学習の充実	P. 24
1-4-2	情報教育の推進	P. 26
1-4-3	キャリア教育の推進	P. 28
1-4-4	防災教育の推進	P. 30
1-5	日本や郷土市川の歴史や文化を学び、国際社会の中で生きる力を育む	P. 32-35
1-5-1	歴史や文化に関する教育の推進	P. 32
1-5-2	外国語教育・国際理解教育の推進	P. 34

◇施策の方向1-1 自分を大切にし、他人を思いやる気持ちを養い、豊かな心を育む

1-1-1 人と関わる力を身に付ける活動の充実

人と関わる力を身に付け、望ましい人間関係をつくるために、学校生活や地域活動などを通して、相手の話をよく聞いたり、自分の思いを相手に伝えたりして、たがいの価値観を認め合う力を育成します。

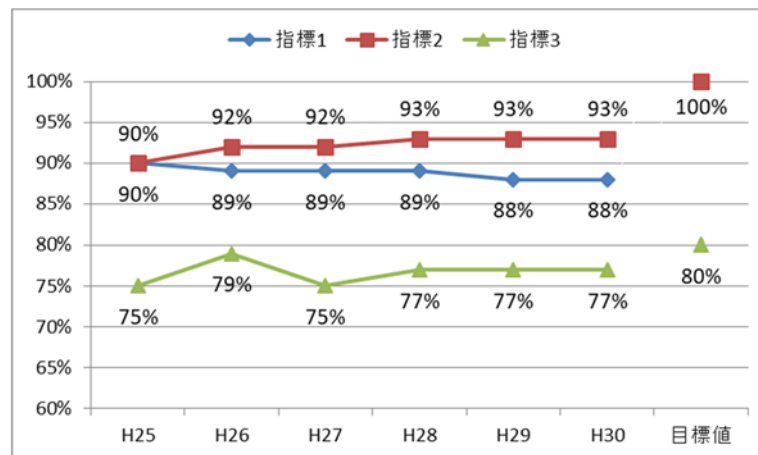
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標 (H30)
1	「進んで挨拶をする」と回答する児童生徒の割合	88% 小5: 89% 中2: 87%	88% 小5: 89% 中2: 87% (H27 小5: 90%)	100%
	《現状分析》 平成28年度からは市内一斉の挨拶運動キャンペーンを設定している。各学校においては、「朝の挨拶運動」など、児童生徒が主体的に活動する取り組みをこのキャンペーンと併せて実施しており、挨拶をする声が増えたという報告がある。学校、家庭、地域での挨拶のうち、家族への挨拶を「あまりしていない 11%」、「全くしていない 4%」となっており、家庭で挨拶をする習慣をつけることが課題である。今後も継続し、家庭・地域と連携した取り組みの充実を図っていく必要がある。			
2	「人の話や考えをよく聞くことができる」と回答する児童生徒の割合	93% 小5: 92% 中2: 94%	93% 小5: 92% 中2: 94% (H27 小5: 92%)	100%
	《現状分析》 指標は、肯定的な回答「できる」と「どちらかといえばできる」の合計値であり横ばいだが、そのうち「できる」と回答した割合は、平成25年度の計画策定時の42%と比べると平成30年度は54%と10ポイント以上増加しており成果が見られる。すべての教科領域で、児童生徒が相手の考えを聞くことを重視した授業づくりが推進され、自分の考え方を深め、広げることにつながっている。さらに、相手の考えを聞いた後で、もう一度自分の考えを確かめたり深めたりする時間を設けるよう、指導・助言に努めていく必要がある。			
3	「自分の考えや思いを伝えることができる」と回答する児童生徒の割合	77% 小5: 76% 中2: 79%	77% 小5: 76% 中2: 79% (H27 小5: 75%)	80%
	《現状分析》 指標は横ばいの状況だが、肯定的な意見のうち「できる」が平成25年度と比べると8ポイント増加している。さまざまな教科領域で、「主体的・対話的で深い学び」に迫るため、「話し合いのルール」等を学校全体の取り組みとしたり、自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりすることを重視した授業づくりが推進されている。今後も考えを形成する手立てや、表現するための言葉の使い方の指導に努めていく必要がある。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においても、施策「人と関わる力を身に付ける活動の充実」をさらに進め、人と関わる力の育成に引き続き努める。

《参考：市立学校・園の設置等状況（平成30年5月1日現在）》

小学校 38校

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援学級	合計	(人)
3,499	3,563	3,566	3,574	3,678	3,658	389	21,917	

中学校 15校

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援学級・夜間学級	合計	(人)
2,856	3,126	3,176	181	9,339	

義務教育学校 1校

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	小計	(人)
18	28	26	19	24	24	139	

第7学年	第8学年	第9学年	小計	合計	(人)
72	59	67	198	337	

特別支援学校 1校

小学部	中学部	高等部	合計	(人)
53	30	56	139	

幼稚園 6園

4歳児	5歳児	合計	(人)
284	349	633	

1-1-2 命を大切にする教育の推進

自分の命はもちろん、他人の命も大切にする意識を育みます。また、自分の良いところをたくさん見つけ、それを伸ばしていくことで、自分はかけがえのない存在と認めることのできる教育を進めます。

○施策の評価

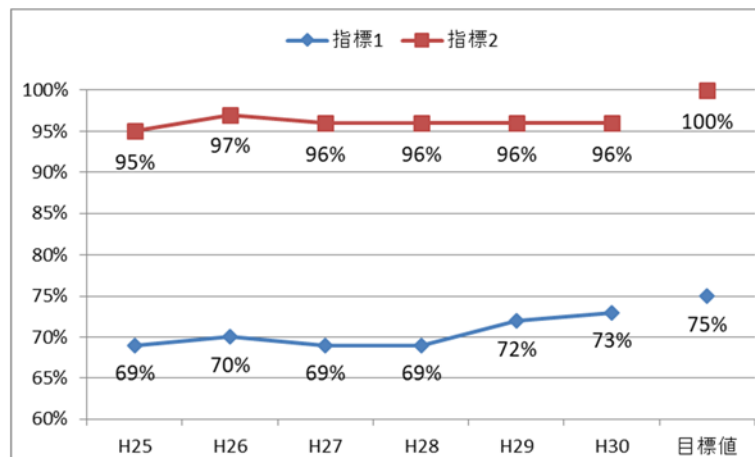
1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標(H30)
1	「自分には良いところがある」と回答する児童生徒の割合	72% 小5:77% 中2:65%	73% 小5:77% 中2:67% (H27小5:77%)	75%
	《現状分析》 平成29年度と比べ指標が1ポイント増加した。中学校において、肯定的な回答のうち、「ある」の回答がH25年度と比べ12ポイント増加しており、成果が見られる。教師が適切な児童理解と評価に努めていくことを基本としながら、日常の授業において、さらに「生徒指導の機能を生かした授業」づくりに取り組み、自己決定の場を設定し、認めて褒めることで、自己肯定感の向上を図ることが重要であると考え。また、特別活動等で自己有用感のもてる場を設定し、自己肯定感のさらなる向上へとつなげていくことにより、目標値の達成に努めていく必要がある。			
2	「友だちや動植物を大切にする気持ちをもっている」と回答する児童生徒の割合	96% 小5:97% 中2:96%	96% 小5:96% 中2:96% (H27小5:96%)	100%
	《現状分析》 関連のある事業に「学校飼育動物管理指導」がある。平成30年度は平成29年度に引き続き、道徳の時間※での実施を希望する学校で優先的に実施した。これにより事業のねらいである命の大切さを学ぶことが効果的に実施された。今後も道徳や体験活動等を中心に、全教育活動を通して生命を尊重する心の育成を図っていく必要がある。			

※道徳は、「特別の教科 道徳」として、小学校では平成30年4月から実施、中学校においては平成31年4月から実施となる。

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においても、施策「道徳教育の充実（命を大切にする教育の推進）」をさらに進め、生命尊重の心の育成に引き続き努める。

1-1-3 道徳教育の充実

道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うため、「道徳の時間」を中心に、学校の教育活動全体を通じた道徳教育の質の向上を図ります。また、人権意識を高め、いじめを許さない心を育成します。

○施策の評価

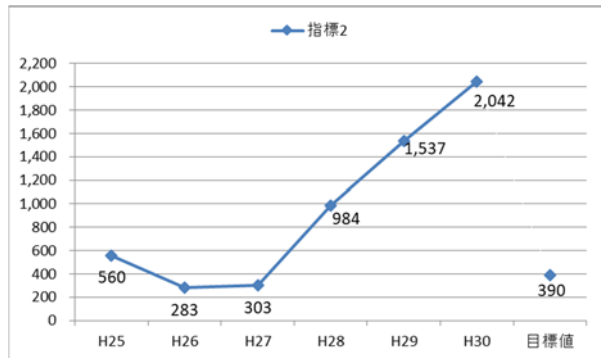
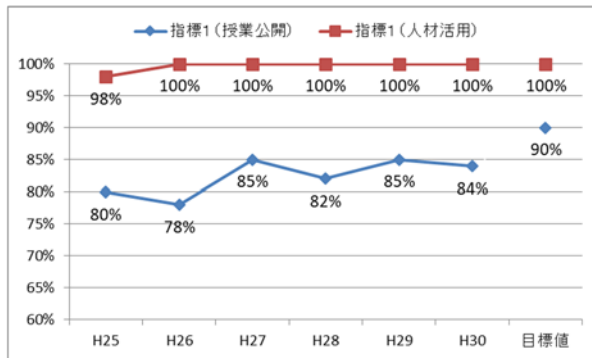
1. 成果指標

成果指標			H29	H30	目標(H30)
1	家庭・地域と協力して道徳教育を進めた学校の割合	授業公開	85%	84%	90%
		人材活用	100%	100%	100%
	《現状分析》 授業公開は、小学校においては平成30年度から始まった教科化に伴い、各学校における道徳科の授業に対する意識と、道徳教育における家庭・地域の理解や協力を得ることへの重要性の認識が高まったと考える。中学校では、平成31年4月からの教科化による授業公開の推進が期待される。人材活用は100%を維持している。今後も、各学校の取り組みを支援し、充実を図っていく必要がある。				
2	学校におけるいじめの認知件数※		1,537件 小：1,270件 中：267件	2,042件 小：1,699件 中：343件	390件
	《現状分析》 認知件数が増加しているのは、各学校で実施している、生活アンケート・いじめアンケート調査、教育相談週間を活用した面談等により、児童生徒の実態をきめ細かく把握している結果であると考える。この結果をもとに、気づきにくいいじめも見逃さず、いじめの早期発見・早期対応に努めていく必要がある。				

※いじめは決して許されないことだが、現実的にはどの学校でもどの子どもにも起こり得るものである。いじめの認知件数は、いじめの兆候をいち早く把握し、積極的に認知していく取り組みが数値として表れたものであり、教職員の目が行き届いていることの証であると考えられる。したがって、いじめの認知件数は、いじめの解消に向けた積極的な取り組みの状況を表す、施策3-3-4の成果指標「いじめの解消率」と併せて見る必要がある。

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においても、施策「道徳教育の充実（命を大切にする教育の推進）」をさらに進め、いじめの早期発見・早期対応と解消率の向上に努める。

1-1-4 体験活動の充実

学校や地域社会において、異年齢の子どもとの交流、ボランティア、福祉体験活動、集団宿泊活動、自然体験活動、文化芸術体験活動など体験活動の充実を図ります。

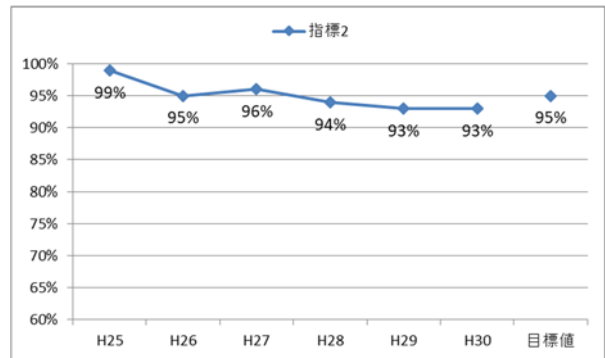
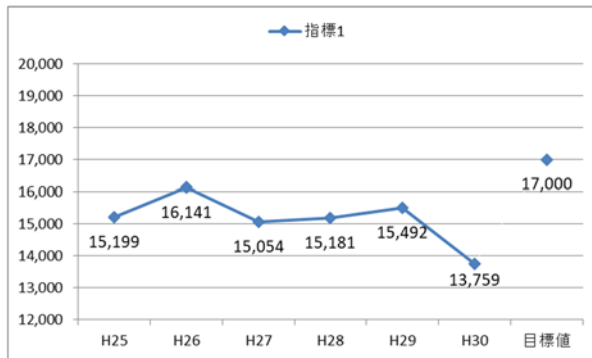
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標(H30)
1	少年自然の家利用者数 ※宿：宿泊利用者 日：野外炊事等の日帰り利用者 プ：プラネタリウムのみ利用者	15,492人 宿：8,621人 日：3,288人 プ：3,583人	13,759人 宿：8,280人 日：2,494人 プ：2,985人	17,000人
	《現状分析》 周辺各市や市公式Webサイトにより広報活動を行った結果、宿泊者数は例年と同程度だった。しかし、日帰り利用は冬季の大規模なイベントが中止になったこと等のため、また、プラネタリウム見学者は夏季の酷暑等天候の影響等により、利用者全体では減少している。今後は市民の総合体験ステーションとしてのPRにさらに努めていく必要がある。			
2	「コミュニティクラブの活動を楽しむことができた」と回答するコミュニティクラブ体験活動参加者の割合	93%	93%	95%
	《現状分析》 指標の数値は90%を超えてはいるものの、既存のイベント活動が多いため、さらなる内容の工夫や、新規イベントの実施等を啓発していく必要がある。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現がおおむね図られてきている。

少年自然の家利用者数が一割程度減少しているが、コミュニティクラブの活動に関する満足度は比較的高い。

3. 対応

次期計画においても、施策「環境学習と体験活動の充実」をさらに進め、豊かな人間性を育めるように引き続き努める。

1-1-5 読書教育の推進

豊かな心を育むために、読書コミュニティ※をはじめとする、多様な読書活動や学習活動での図書の活用など、幼児期からの読書教育を推進します。また、図書館の役割が重要であることから、図書館資料の整備、学校図書館相互や公共図書館とのネットワークの積極的な活用など、図書館機能の充実を図ります。

※読書コミュニティ…家庭・学校・地域が一体となって読書活動を進め、読書を囲んだ子育てを進める地域社会

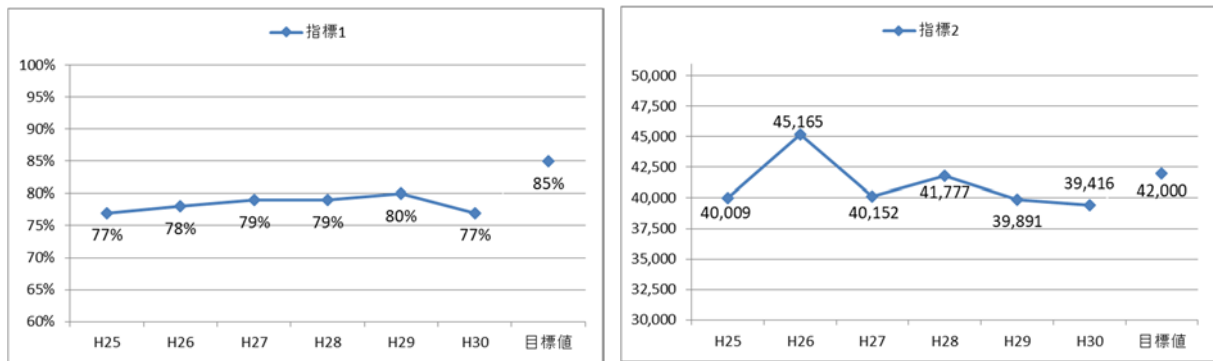
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標(H30)
1	「読書が好き」と回答する児童生徒の割合	80% 小5:82% 中2:77%	77% 小5:80% 中2:74% (H27小5:81%)	85%
	《現状分析》 各学校では、読書に関わる行事をはじめとして、読書を推進する取り組みがなされている。国語科においても単元学習の中での読書活動の取り入れが増えている。しかし、教育課程の編成として、朝の読書や読み聞かせの時間が減少したり、昼に読書タイムを設けたりしたため、昼休みが少なくなったことによる児童の意識の変化が見られた学校があった。自ら図書室に足を運ぶ児童も減少している傾向が見られるため、本に触れる機会をこれまで以上に増やしていくことが重要と考える。			
2	学習活動などで、学校図書館を利用した授業時間数	39,891 時間 小:34,247 時間 中:5,644 時間	39,416 時間 小:33,265 時間 中:6,151 時間	42,000 時間
	《現状分析》 授業時間数は少しずつ減少傾向にある。その背景のひとつとして、インターネットの普及により、それを利用した情報収集が可能となったことがあげられる。学校では、授業時間数を確保するための工夫を行っており、学校図書館を利用した授業の時間配分についても見直されていると考えられる。中学校での授業時間数は平成29年度と比べ増加しており、文部科学省の委託を受けた調査研究協力校を中心に、学校図書館を「学習・情報センター」とした活用が各中学校でも広がりつつあると考える。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現がおおむね図られてきている。

読書が好きな児童生徒の割合は平成 29 年度と比べ減少したが、学校では、ボランティアによる読み聞かせや読書月間など、さまざまな取り組みを進めている。

3. 対応

次期計画においても、家庭・地域と連携を図りながら、施策「読書教育の推進」をさらに進める。

◇施策の方向1-2 基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図り、活用する力を育成する

1-2-1 確かな学力を育成する取り組みの推進

基礎的・基本的な内容を確実に習得し、個に応じた学びを充実させるために、指導方法の改善と学習環境の整備に取り組みます。また、身に付けた知識や技能を学習や生活に活用していく力を高めるために、問題解決型の学習をさらに充実します。

○施策の評価

1. 成果指標

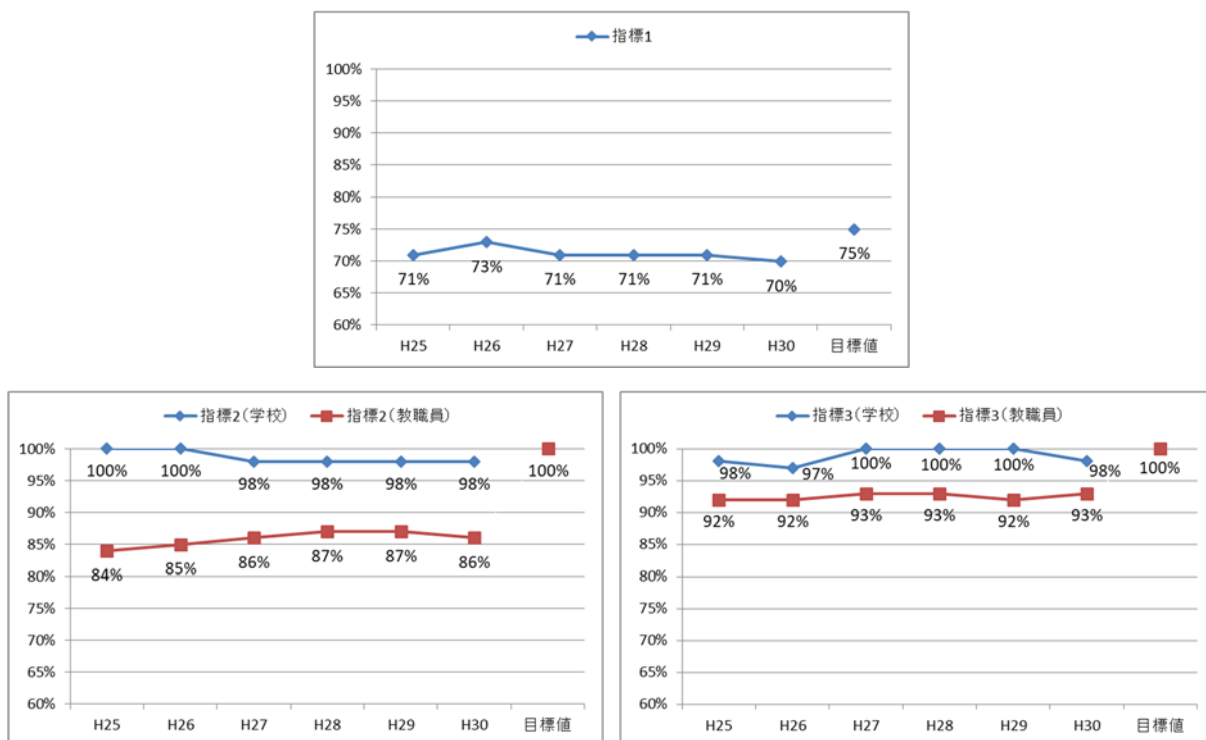
成果指標		H29	H30	目標（H30）	
1	「学校の勉強が楽しい」と回答する児童生徒の割合	71% 小5：80% 中2：61%	70% 小5：78% 中2： <u>60%</u> (H27小5：80%)	75%	
	《現状分析》 指標は横ばいの結果となっており、目標指数達成に向け、取り組みの改善が求められる。また、小中それぞれの向上を目指しながら、特に中学校での増に向けた取り組みを図る必要がある。各学校においては、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る中で、発問・板書・ノート指導を工夫したり、ICT機器を活用したり、ペア・グループ活動を取り入れたりしている。今後も児童生徒が学校の勉強が楽しいと感じられるように、指導方法の改善と学習環境の整備に取り組んでいく必要がある。				
2	問題解決的な学習を重視して、年間を通して、言語活動※や体験活動を意欲的に授業に取り入れている学校・教職員の割合	学 校	98%	98%	100%
		教職員	87%	86%	100%
3	児童生徒の実態に応じ、生徒指導の機能を生かした授業※づくりに取り組んでいる学校・教職員の割合	学 校	100%	98%	100%
		教職員	92%	93%	100%
《現状分析》 学校訪問、課題別訪問、生徒指導訪問などで周知したことで学校では、児童生徒を主体とした授業づくりを重視して取り組んでいる。教職員の自己評価がやや低い結果となっているのは、取り組んではいるものの実態差がある学級の中で、児童生徒主体の授業としてはまだ不十分であると、教職員が感じているものとする。教職員の意欲を大切に、引き続き指導助言を行っていく必要がある。					

※言語活動…「話すこと・聞くこと」や「書くこと」、「読むこと」に関する基本的な国語の力を定着させたり、言葉の美しさやリズムを体感させたりする活動

※生徒指導の機能を生かした授業…教師と子ども、子ども同士の良好な人間関係のもと、教師の一方的な説明ではなく、子どもが自分の力で課題を解決し、教師からも子どもからも認めもらえる充実感のある授業

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



《参考：平成 30 年度全国学力・学習状況調査の結果》

小学校6年生 平均正答率 (%)

	市川市	千葉県	全国
国語A	70	70	70.7
国語B	55	53	54.7
算数A	64	62	63.5
算数B	53	51	51.5
理 科	61	61	60.3

中学校3年生 平均正答率 (%)

	市川市	千葉県	全国
国語A	77	76	76.1
国語B	62	61	61.2
数学A	66	64	66.1
数学B	48	46	46.9
理 科	66	65	66.1

※平均正答率は、文部科学省の発表に基づき、全国は小数第1位まで、千葉県及び市川市は小数点以下を四捨五入した結果を示しています。

※平均正答率は、小学校でも中学校でも全国平均と同等もしくは上回っていますが、教育委員会、学校では、本調査の結果分析を行い、さらなる学力向上及び課題解決に努めています。

2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においても、施策「児童生徒の確かな学力を育成する取組の推進」をさらに進め、個に応じた学びの充実に努める。

◇施策の方向1－3 健康に関する意識を高め、健やかな体を育成する

1－3－1 望ましい生活習慣を身に付ける取り組みの推進

健全な生活習慣を身に付けるために、検診や調査に基づき、一人一人の実態に応じた指導・支援を行います。また、家庭・学校が一体となって、「早寝・早起き・朝ごはん」などの生活習慣を身に付ける取り組みを推進します。

○施策の評価

1. 成果指標

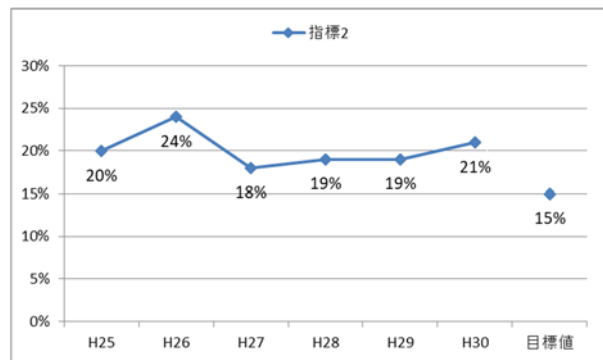
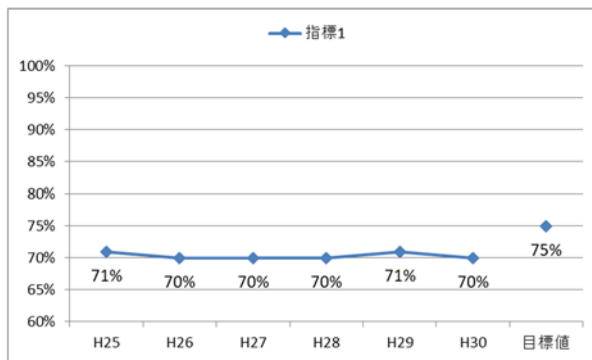
成果指標		H29	H30	目標(H30)
1	「早寝・早起き・朝ごはんを実践している」と回答する児童生徒の割合	71% 小：72% 中：70%	70% 小：71% 中：69%	75%
	《現状分析》 平成29年度までと大きな数値の変動はないが、就寝時刻や朝食の摂取については、毎年、学年の上昇に伴いポイントが減少している。児童生徒の意識が高まるよう、今後も、生活リズムカードやアウトメディアなどの工夫した取り組みを実施していく。また、家庭に取り組みの紹介や協力を依頼するなど、啓発活動を行っていく必要がある。			
2	小児生活習慣病予防検診※の児童生徒の有所見率※	19%	21%	15%
	《現状分析》 平成29年度と比べ若干ポイントの増加が見られる。毎年、検診対象の児童生徒が変わるため、比較することは難しいところもあるが、この検診の定着が見られるのは、大きな成果である。引き続き、受診の啓発とヘルシースクールの推進を図っていく必要がある。			

※小児生活習慣病予防検診…将来の生活習慣病（糖尿病、高血圧症などの病気）の因子をもつ児童生徒の早期発見と個別指導を目的とする検診

※有所見率…肥満度・腹囲・血圧・血糖・コレステロール・中性脂肪において何らかの所見のある児童生徒の割合

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現がおおむね図られてきている。

小児生活習慣病予防検診の有所見率は増加しているものの、早寝・早起き・朝ごはんの習慣は一定割合を維持している。

3. 対応

次期計画においても、学校と家庭の連携を図りながら、施策「望ましい生活習慣を身に付ける取組の推進」をさらに進め、健やかな体の育成に努める。

1-3-2 食育の推進

調理実習や農業体験などの体験的な活動を通して、食と健康に関する興味関心を高めます。また、食品の安全性などの知識を習得し、食に関する自己管理能力の育成を推進します。さらに、給食の時間をはじめ、授業や委員会活動などに栄養教諭や栄養職員が積極的にかかわり、「食」に関する指導の全体計画のもと学校教育活動全体で取り組むとともに、家庭と連携して望ましい食習慣を身に付ける取り組みを進めます。

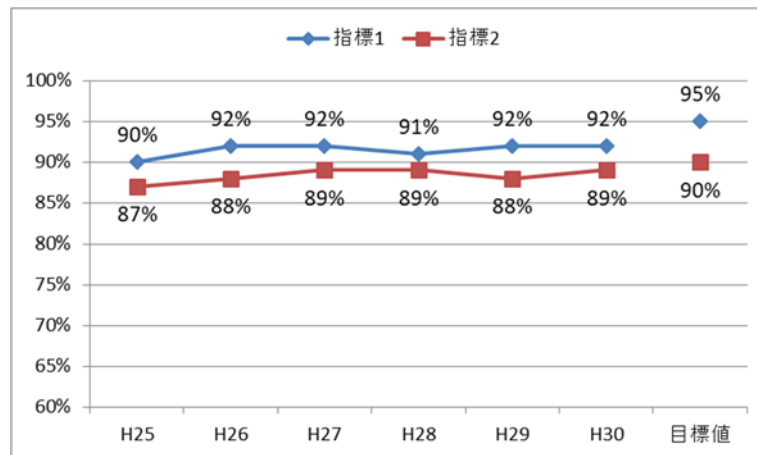
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標 (H30)
1	「給食を楽しんで食べている」と回答する児童生徒の割合	92% 小5: 94% 中2: 90%	92% 小5: 93% 中2: 90% (H27 小5: 94%)	95%
	《現状分析》 中学校では、肯定的な回答の中でも「楽しく食べている」が平成25年度と比較し14ポイント増加しており効果が見られる。毎日の給食時間に、献立や食材に関する豆知識など児童生徒が興味を持つような情報を放送で紹介したり、行事食、イベントとの連携などを工夫したりして、楽しく喫食できる環境を整えてきた結果が92%という高い数値の維持につながっている。今後は、取り組みについて家庭への周知を図り、連携を深められるように努めていく必要がある。			
2	「主食、主菜、副菜がそろった食事をしている」と回答する児童生徒の割合	88% 小5: 89% 中2: 87%	89% 小5: 89% 中2: 89% (H27 小5: 90%)	90%
	《現状分析》 毎日のお昼の放送で、栄養について情報を提供し続けていることが安定した現状値につながっている。また、中学校では、肯定的な回答の中でも「している」が平成25年度と比較し13ポイント増加しており、家庭への浸透の効果が見られる。今後は、家庭科等での指導内容を家庭にも周知し、児童生徒が学んだことを学校以外でも生かせるよう、さらに家庭と連携を図りながら取り組んでいく必要がある。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においても、学校と家庭の連携を図りながら、施策「食育の推進」をさらに進め、食に関する自己管理能力の育成に努める。

1-3-3 体力向上の取り組みの推進

子どもの体力向上を図るため、運動量が十分確保された体育の授業を実施し、休み時間には外遊びができる環境づくりに取り組みます。また、運動部活動の充実を図るとともに、地域のスポーツ指導者などと連携し、子どもが積極的に運動やスポーツに親しむ環境づくりを推進します。

○施策の評価

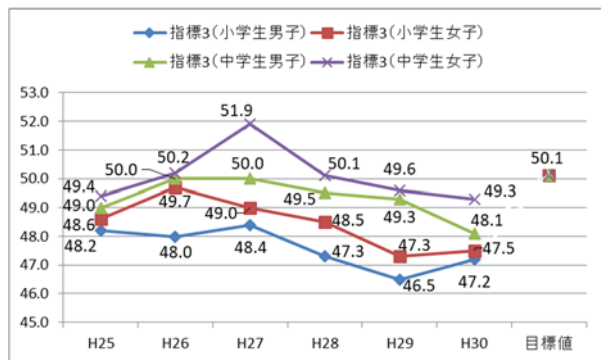
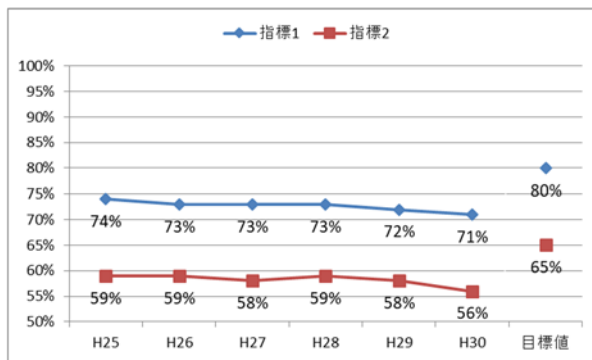
1. 成果指標

成果指標				H29	H30	目標（H30）
1	「運動が好き」と回答する児童生徒の割合			72% 小：75% 中：66%	71% 小：75% 中：64%	80%
	《現状分析》 全体としては、運動が好き（好きな方）と回答した割合に大きな変化はなかった。運動への志向の高さは、体力テストの数値に影響してくる。スモールステップで運動に取り組ませ、できた喜びやうまくいった経験を味わわせることが大事である。					
2	「休み時間や昼休みに外遊びをしている」と回答する児童生徒の割合			58% 小：68% 中：37%	56% 小：68% 中：33%	65%
	《現状分析》 小学校の数値は、あまり大きな変化はなかったものの、遊・友スポーツランキングちばに積極的に取り組む学校が増えてきている。長縄月間など期間を限定した取り組みをしている学校が多く見られるが、年間を通してさまざまな遊びや運動に取り組む工夫が必要である。中学校の数値が4ポイント減少してしまった。各校の実態に応じた取り組みを呼びかけていく必要がある。					
3	新体力テスト※の 得点平均	小学 5年生	男子	46.5点	47.2点	50.1点
			女子	47.3点	47.5点	50.1点
		中学 2年生	男子	49.3点	48.1点 (H27小5:48.4点)	50.1点
			女子	49.6点	49.3点 (H27小5:49.0点)	50.1点
	《現状分析》 小学5年生は、平成29年度と比べ、男女ともに数値が少し上がった。しかし、握力、上体起こし、長座体前屈以外の種目については、すべて50点を下回っている。特に、ソフトボール投げの数値が低い。実態として学校間に格差があり、事前に体力テストに関する研修会や、子どもたちが実際に体験する時間を設けている学校では、成果が上がっている。教職員の意識を高めていくために、若年層教諭を対象とした、走る・跳ぶ・投げる動きの測定及び指導に関する研修を充実させて効果を引き出せるよう努めていく必要がある。 中学2年生は、男女ともに、若干数値が低下している。これまで同様、ボール投げに課題がある。投げる動作の指導や動きの経験を多く取り入れることを促していく。また、立ち幅跳び、反復横跳びにおいてもTスコア値50を下回っている。生徒自身が体力テストの結果をふまえ、日常生活の中に体力向上の取り組みを取り入れる等の工夫ができるように支援していく必要がある。					

※新体力テスト…国が、国民の体力・運動能力の現状を把握するために平成11年度から毎年度実施している8種目のテスト

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現がおおむね図られてきている。

運動や外遊びに関する成果指標は微減しているものの、小学1年生から中学3年生の新体力テストの総合得点では、男女ともに中学3年生の得点が最も高い。

3. 対応

次期計画においても、施策「体力向上の取組の推進」をさらに進め、各学校の子どもの実態をとらえた体力づくりの取り組みを図る。

◇施策の方向1－4 社会的な問題に関する認識を深め、意欲と実践力を育む

1－4－1 環境学習の充実

環境についての理解を深め、自らの生活の中で環境を大切にする姿勢が身に付くよう、体験的な環境学習の充実を図ります。

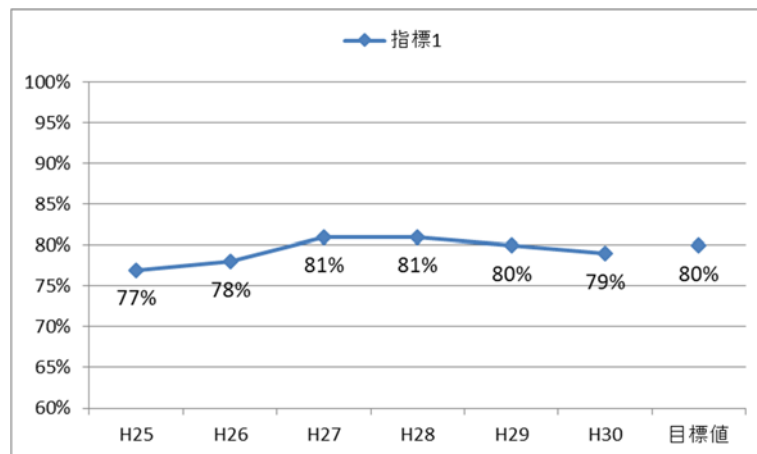
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標（H30）
1	「環境のことを考えた行動をしている」と回答する児童生徒の割合	80% 小5：82% 中2：76%	79% 小5：79% 中2：79% (H27小5：84%)	80%
	《現状分析》 クールアースデーを契機にした学校への環境保全活動取り組みの呼びかけを継続している。また、実施状況について調査を行い、学校へ情報提供している。裏紙利用、ごみの分別、給食の残菜削減等への取り組みは、すべて90%を超える実施率となっている。委員会活動を活用した取り組みや環境に関する学習が大半の学校で継続されているので、今後も指導資料の提供等を行い、現状を維持または向上できるよう努めていく必要がある。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においても、家庭・地域と連携を図りながら、施策「環境学習と体験活動の充実」をさらに進める。

1-4-2 情報教育の推進

多様な情報手段の特性を理解し、情報を適切に活用できる能力を育成するために、発達段階に応じた情報教育を推進します。また、情報発信に伴う責任や情報を判断する力を子どもに身に付けさせるため、情報モラルに関する教育を推進します。さらに、学習においては、子どもが意欲的に取り組めるようＩＣＴ機器を積極的に活用し、学習効果を高めます。

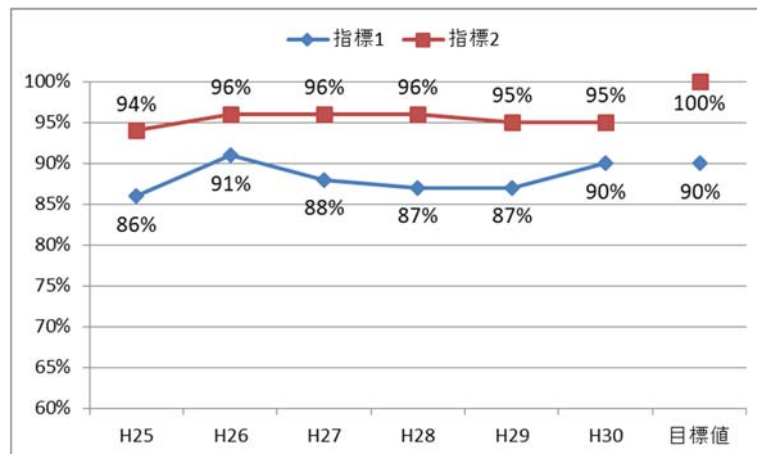
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標（H30）
1	「パソコン、書画カメラ、プロジェクターなどを用いた授業や学習はやる気ができる」と回答する児童生徒の割合	87% 小：89% 中：84%	90% 小： 91% 中： 87%	90%
	《現状分析》 ＩＣＴ支援員を学校へ派遣したことや、現行のＩＣＴ機器導入後6年が経過したことから、授業等で積極的に進んで活用されたものとする。			
2	「パソコンや携帯電話などの安全な使い方がわかり、自分を守り、他人に迷惑を掛けないように気を付けている」と回答する児童生徒の割合	95% 小5：96% 中2：95%	95% 小5： 95% 中2： 96% (H27小5：96%)	100%
	《現状分析》 平成29年度に引き続き、外部講師を招聘し、教職員を対象として、情報モラル研修会を実施した。継続的な取り組みにより、情報モラルについての意識が高い児童生徒の割合は、高い水準を維持している。また、中学校は肯定的な意見の中でも「気を付けている」が着実に増加しており、成果が見られる。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



《参考：教育ICT機器の整備状況（平成30年度現在）》

- ・教職員用PC 2,132台（教職員1人1台）
- ・児童生徒用PC コンピュータ教室2,255台（各小・中・義務教育学校41台）
図書館調べ学習用 275台（各小・中・義務教育学校5台）
- ・書画カメラ・プロジェクター 全校で251台（学校規模に応じて1～6台）

2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においても、施策「情報教育の推進」をさらに進め、学習の基盤となる資質能力としての情報活用能力を育てるとともに、効果的なICT機器の活用と情報モラルの周知に努める。また、ICTの環境整備や教職員の指導力向上については、次期計画において、施策「教育のICT環境整備」「教職員のICT活用指導力の向上」を掲げ、さらなる推進に努める。

1-4-3 キャリア教育の推進

子ども一人一人が、社会的・職業的に自立するために必要となる基礎的な能力や態度を教育活動全体を通じて育成します。

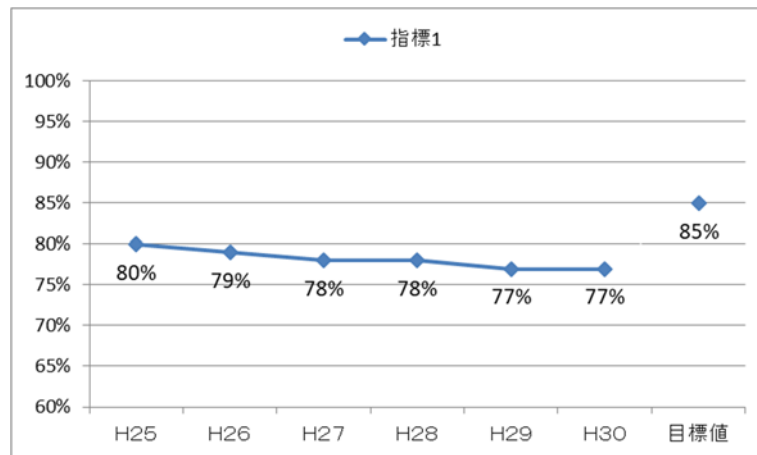
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標（H30）
1	「将来、自分になりたい職業や、やりたい仕事がある」と回答する児童生徒の割合	77% 小5：85% 中2：68%	77% 小5：83% 中2：70% (H27小5：86%)	85%
	《現状分析》 社会人として自立した人を育てる観点から、各学校では、特別活動を要としてキャリア教育を進めている。例えば、小学校では職場見学やあこがれの仕事調べ、中学校では職場体験や職業講話等といった体験活動を設定し、児童生徒のキャリア発達を促す取り組みを行っている。キャリア教育は、学校教育のさまざまな場面で行うことができ、教職員に対し、キャリア教育への認識を一層高めるべく、研修の機会等を通して指導・助言に努めていく必要がある。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現がおおむね図られてきている。

成果指標は伸び悩んでいるものの、すべての中学校において職業体験を行っている。また、地域の人を招いた職業講話を行っており、このような取り組みが、児童生徒が職業へのあこがれや夢を持つことにつながっていることが実施後の感想からうかがえる。

3. 対応

次期計画においては、施策「キャリア教育・職業教育の推進」「地域や企業との連携推進」をさらに進め、教育活動全体を通じて、社会的・職業的自立に向けた能力・態度の育成に努める。

1-4-4 防災教育の推進

東日本大震災の教訓を生かし、防災意識の高揚を図ります。また、災害時における避難行動などに必要となる適切な判断力・対応力を育成します。

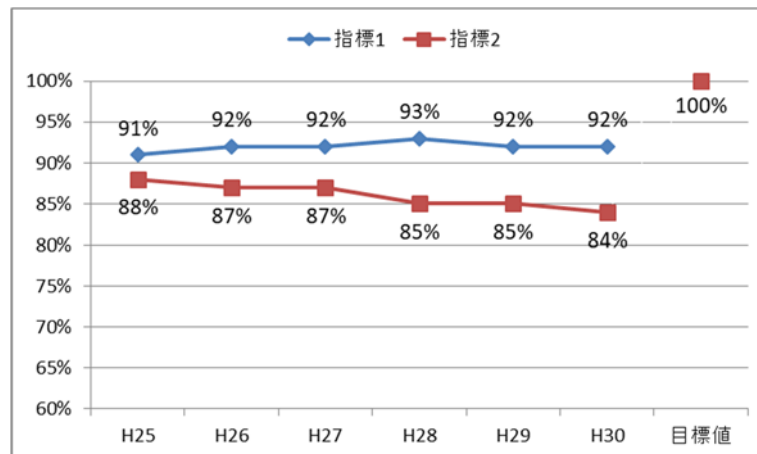
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標 (H30)
1	「災害発生時に、自分の命を守るためにどのような行動をとれば良いか知っている」と回答する児童生徒の割合	92% 小5：94% 中2：89%	92% 小5：93% 中2：90% (H27小5：95%)	100%
	《現状分析》 平成30年度の「防災教育の日」(3月11日)に向けて事前に、指導に役立つ教職員向け資料を提供した。全校で取り組んでいるシェイクアウト訓練が定着してきている。自分自身で行う安全確保の術は、命を守る第一歩であり、今後も避難訓練等の機会を活用しながら、徹底して定着を図っていく必要がある。年間を通して実施されている各園・各校での訓練も、災害の種類や状況に応じて実施する等工夫が見られるが、さらに効果的で具体的な指導内容等について、広く周知を図っていく必要がある。			
2	「災害発生時に、自分の身の回りでどのような場所が危ないか知っている」と回答する児童生徒の割合	85% 小5：88% 中2：81%	84% 小5：88% 中2：80% (H27小5：91%)	100%
	《現状分析》 「防災教育の日」の指導資料として、自宅や街中での危険個所について簡潔にまとめたリーフレットを児童生徒配付用に作成した。指標では小中に差が見られるため、中学校への手立てが必要である。学級指導等で活用し、さまざまな場面での判断力を高めるようにしたいと考えている。総合的な学習等で、防災をテーマに探究し、児童生徒自身の判断力を養う良い実践があれば教職員に広く周知し、命を守るための指導力の向上に努めていく必要がある。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現がおおむね図られてきている。

身の回りの危険な場所の把握が万全であるとはいえないが、災害発生時の行動は一定程度身に付けられている。

3. 対応

次期計画においても、家庭・地域と連携を図りながら、施策「防災教育の推進」をさらに進め、適切な判断力・対応力の育成に努める。

◇施策の方向1－5 日本や郷土市川の歴史や文化を学び、国際社会の中で生きる力を育む

1－5－1 歴史や文化に関する教育の推進

郷土を愛する心と豊かな情緒を培うために、学校、博物館、地域団体などと連携して、日本や郷土市川の歴史や文化を深く理解する機会を充実します。

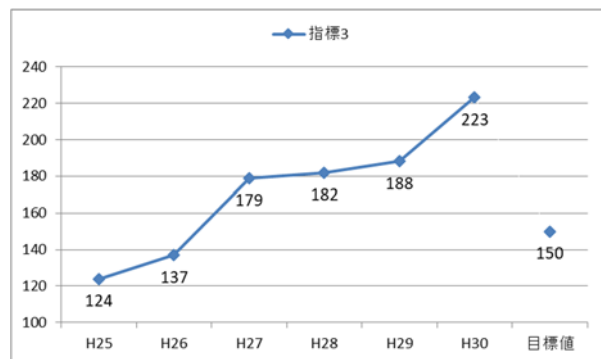
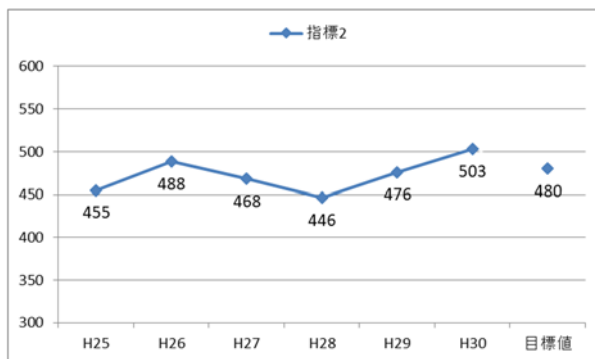
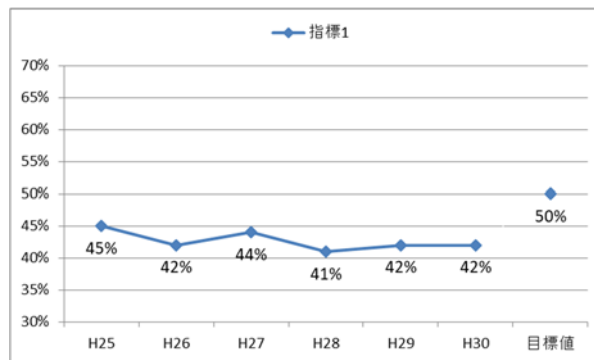
○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標(H30)
1	「市川市の歴史や文化に関心がある」と回答する児童生徒の割合	42% 小5:53% 中2:29%	42% 小5:51% 中2:31% (H27小5:55%)	50%
	《現状分析》 平成29年度は若年層教員の地域理解に資するため市内巡検を実施したが、平成30年度は実施していない。引き続き、市川の歴史遺産の情報提供を教職員に周知するとともに副読本「私たちの市川」を活用した授業づくりの研修を実施し、市川への理解が授業に生かされるように努めていく必要がある。			
2	教職員対象の研修会の参加人数	476人	503人	480人
	《現状分析》 郷土学習情報化研究員を講師として、3年目教員を対象とした社会科学習研修会を実施するほか、初任者を対象として博物館や公共図書館の活用方法を学ぶ研修会を実施し、郷土についての理解を深める学習に役立てられるようにした。			
3	学校が、博物館の出前授業・体験活動を利用した回数	188回	223回	150回
	《現状分析》 市内公立私立小学校などからの利用回数は、平成29年度と比べ35回(18.6%)の増加であり、学校からの要望にも応えることができています。今後は、博物館まで遠距離の学校について出前授業などを活用しながら、利用回数の向上に努めていく必要があります。また、実施時期が集中することによる工夫が必要である。			

●基本的方向1 子どもの姿●

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においても、施策「地域の歴史や文化に関する教育の推進」をさらに進め、これまで以上にもてる資源を活用し、郷土市川の歴史や文化を深く理解する機会の充実を図る。

1-5-2 外国語教育・国際理解教育の推進

外国語への興味・関心を高め、外国語を活用したコミュニケーション能力を育成するために、小学校では英語活動などを推進し、中学校では英語の能力の向上を目指します。また、小中学校で連続した指導が行われるよう、連携を強化し、指導内容の充実と体系化を図ります。さらに、異なる文化をもつ人々と理解し合い、協調していく力を育成するために、外国の歴史・文化・生活習慣を学ぶ機会を充実します。

○施策の評価

1. 成果指標

成果指標		H29	H30	目標 (H30)
1	【平成 29 年度まで】 「外国語活動の授業が楽しい」と回答する児童<小学校5・6年生>の割合	77%	—	95%
	【平成 30 年度】 「英語の授業が好き」と回答する児童<小学校5・6年生>の割合	—	65%	80%
	《現状分析》 平成 30 年度調査は、文部科学省が実施した「小学校外国語活動実施状況調査」の調査項目に合わせ、アンケートの設問等を変えて実施した。このことから、平成 29 年度の数値と単純な比較はできないが、「英語の授業が好き」と回答する児童の割合が大きく減少した。これは、次のような背景があると考えられる。 ①「英語の授業が楽しい」という質問を「英語の授業が好き」の質問に変えたことにより、児童の回答が変化したこと。 ②平成 32 年度の教科化の全面実施に向けて先行実施を行い、これまでの外国語活動での「話す」「聞く」を中心とした「楽しむ授業」だけでなく、「読む」「書く」を取り入れた「学ぶ」という傾向が少し強まった授業に変わったこと。 ③週 1 コマの授業が週 2 コマ、年間 70 コマになり学ぶ量が増えたこと。 先行実施 2 年目を迎えるにあたり、教員研修や外国語活動指導員の研修も含め、全面実施に向けて、授業改善等の早急な対策に取り組んでいく必要がある。			
2	【平成 29 年度まで】 「英語の授業が楽しい」と回答する生徒<中学校1・2年生>の割合	64%	—	100%
	【平成 30 年度】 「英語の授業が好き」と回答する生徒<中学校1・2年生>の割合	—	65%	70%
	《現状分析》 平成 30 年度調査は、文部科学省が実施した「小学校外国語活動実施状況調査」の調査項目に合わせ、アンケートの設問等を変えて実施した。「英語の授業が好き」と回答した生徒が 60%を超えており、(中 1 のみを見ても平成 29 年度同様、70%を超えている。) 国の調査結果と比較すると、本市の方が高い現状と言える。小学校英語との接続を大切にしながら、教職員の研修も含めて目標の実現を目指していく必要がある。			
3	英検（実用英語技能検定）3級ないしは英検3級と同等の力を有する生徒の割合	62%	61%	50%
	《現状分析》 平成 30 年度からあらためて、3 年間にわたり、千葉県は、県内の全中学生を対象に「千葉県英語の学力状況調査」を実施している。中学 3 年生の段階で「3 級レベル以上」にあたる割合は 60%を超えている。引き続き、市川市の小学校外国語教育と連携しながら中学校における外国語教育の指導改善等に役立てていく必要がある。			

●基本的方向1 子どもの姿●

※成果指標1・2について、平成29年度は選択肢を変更している。また、平成30年度は設問と選択肢を変更している。成果指標1と2については、設問の問いと選択肢を文部科学省の調査と合わせるために変更した。このため、平成29年度までと単純比較はできないが、中学校では国の調査結果を上回っている。

【平成28年度までの選択肢】

- ①楽しい
- ②まあまあ楽しい
- ③楽しくない

※ 現状値は①と②の合計の割合

【平成29年度の変更】

- ①楽しい
- ②どちらかといえば楽しい
- ③どちらともいえない
- ④どちらかといえば楽しくない
- ⑤楽しくない

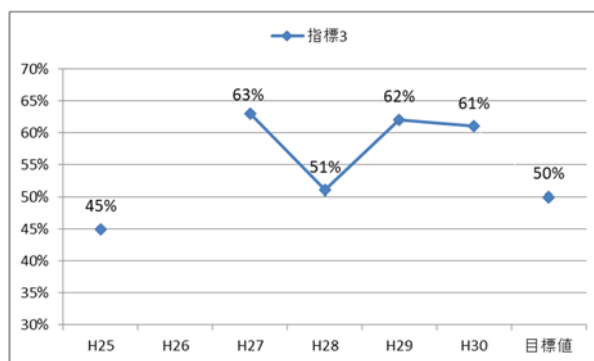
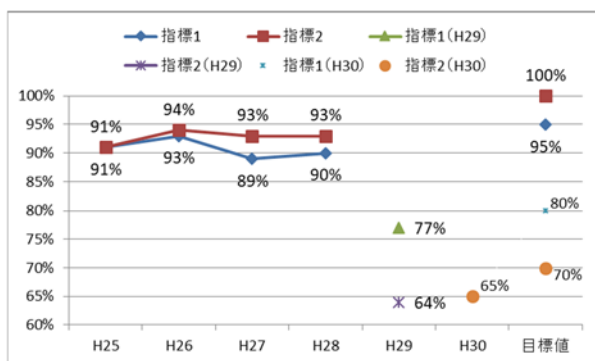
※ 現状値は①と②の合計の割合

【平成30年度の変更】

- ①好き
- ②どちらかといえば好き
- ③どちらともいえない
- ④どちらかといえばきらい
- ⑤きらい

※ 現状値は①と②の合計の割合

【成果指標経年表】



2. 施策の進捗状況

施策の実現が図られてきている。

3. 対応

次期計画においては、施策「外国語教育の推進」「国際理解のための学習の推進」「青少年の海外交流支援」をさらに進め、グローバルに活躍する人材の育成に努めるとともに、学習環境の整備を図る。